

目的：自動販売機で販売されている緑茶、ウーロン茶、紅茶、コーヒー飲料中のカフェイン含量を測定するとともに、自動販売機の販売飲料調査および女子短大生の飲料の摂取状況等について調査した。

方法：①各種飲料中のカフェイン含量の測定はBlauchら^{a)}によるHPLC法により行った。②姫路市周辺の自動販売機の設置状況、販売飲料の種類等を調査した。③女子短大生(1591名)の飲料の嗜好ならびに摂取量等についてのアンケート調査を行った。

結果：①各メーカーの缶入り緑茶100g中のカフェイン量は11.6~19.1mgの範囲内であった。また、1缶当たりでは39.4(340ml中)~64.9mg(同量)となった。ウーロン茶では100g中13.6(1パック27.2mg)~25.8mg(1缶87.7mg)であった。缶および紙パック入り紅茶では100g中10.6(200mlの紙パックでは27.6mg)~27.1mg(340ml入り1缶では80.2mg)の含有量であった。紙パックや缶入りコーヒー中のカフェイン量は100g中55.5~61.4mgと最も多く、コーヒー飲料の容量は他の飲料と比較して少ないが、全部飲んだ場合の摂取カフェイン量は缶入りで平均114mg(190ml)、紙パック(140~150ml)で88mgとなった。②姫路市周辺のアルコールを除く飲料の自動販売機の数半径1kmの範囲で調べたところ、一般の住宅地域でも100~150台、商業地や道路の状況によってはこれ以上多く設置されていた。なお、販売飲料の内、最も多いのはコーヒーで全体の約30%、次いで、炭酸飲料、ジュース類、紅茶の順となった。③女子短大生が自動販売機で購入する飲料の内、最も多いのは紅茶であった。 ^{a)}Blauchら：J. Food Sci., 48, 745-750(1983).